

## スタディーツアー報告

### 1 二本松市 同朋幼稚園 (8/27) 理事長 佐々木道範先生談より

#### 「あれから3年半」

現在の日常の中には、「劇的な変化」はない。

しかし2011.3.11から3年5ヶ月、変化はある。

あつという間に3年以上が過ぎた。少しずつ風化してきて、「なかったことに」「終わったことに」という流れが出来つつあるが、本質的には何にも終わっていない。

しかしイキイキと生きるために、豊かに楽しく過ごせるように色々と考えている。少しでも気にせずのびのびと遊べるような環境を作ることを心がけている。

子どもたちをどう守るかを、答えはわからないけど色々と考えている。

甲状腺がんの人数が福島で104名と増えてきている。しかし福島を「なかったこと」「終わったこと」にしたい、隠したい人たちの圧力もある。表記にずるさがある。増えている。きつい。園児も一人手術している。

「当時18歳以下の子の検査」医者、政府の言うことがメチャクチャでわからない。福島の子どもよりも守りたいものがあると思えない。

4号機の核燃料の状況…秘密保護法案が通った次の日からまったく情報が出なくなった。そして全て事後報告。「こうでした」。なにが本当かわからない。

震災時、安定ヨウ素剤、医療従事者にだけ配った。なぜ？

原発が未収束なのが、最大の不安。出るはずのないベクレルが検出、東電のガレキが原因だった。

「4兆ベクレル」。「言えよ！！」と言えば、「そんな義務はない」

「甲状腺がんは地域差なし」。だから原発のせいじゃない、と。そんなわけない！

原発問題「まだやってるの？」といつも聞かれる。

#### 「生まれる対立」

3年間、圧力を感じている。

大人、保護者もつらい思いをしている。気を病み、自殺する人も少なくない。お寺の檀家さんでも8人ほど。自殺に対し、やっと国としての対策委員会を作るという話が出始めている。園としても対策委員会を設けていくことに。

このあたりの知っている中でも、3年で3人（おばあちゃん、50代、20代（医科大3年生））南相馬で8人（おじいちゃん、おばあちゃん）が。

3年たって、自殺する人が増える。生きる力を奪っていく現状。人生を奪われている。作付けもできない、猟師もできない、酪農もできない。

人生を奪っていく。お金は補償されても、生きる力が出ない。

生きる目的、楽しみを失った人が多い。

「震災後、一回も孫に会っていない」（南相馬の仮設住宅のおばあちゃん）。

生きる楽しみを奪っていく。福島は田舎だから、自然と共に生きていた。その自然が壊れた。自然でつながる人間関係が壊れた。作物を交換しあうような生活が壊れた。それが一番きつい。

震災から3年たち、おじいちゃんたちは「(科学的な根拠はないが)もう大丈夫だろう」と育てた野菜を善意でくれる。もらった人は子どもに食べさせることができず、新聞にくるんで捨てる…心が壊れる。

家庭の畑（規模は小さいとは限らない）は、除染なんてしない。でも、畑で野菜を育てるのを生きがいにしてきた人もいる。

世代間のギャップ、家族の中にもギャップが生じている。そこに見えない対立が生まれる。家庭や地域がバラバラになる。

誰も悪くないのに、放射能が降ってきたことが悪いのに、人々は対立していく…。

浪江町から二本松に2300人ほどの人が避難してきている。（同じくらいの人数が、二本松から他の市町へ避難している）。その人たちのことを、二本松の人はよく言わない。

「あいつら金もらってんだろ」（一人10万+α…4人家族なら40万以上）

浪江から避難してきて、二本松に戸建を買う人もいる。

複雑な対立。二本松の人は補償対象じゃないから。でも、浪江の人も苦しんでいる。

お金は厄介…浪江の人は、故郷を奪われている人たちなのに。

浪江の人はいわきナンバー。パチンコ屋の駐車場はいわきナンバーばかり。昼からすることもなく、パチンコ屋に通う人が多い。でも仕方ない、他にすることがない。生きがいがいがない。金もらって遊んで酒飲んでいるだけ。

そんな現状に、二本松の人たちは「浪江の奴らは気に食わない」と文句を言う。

そのように思っていた二本松の電気屋さんが、クーラーの取り付け工事で浪江の人の家に行った。昼間から父親は飲んだくれてる。娘は夏も近いのに出しっぱなしのコタツにはいってテレビを見ている。口もきかない。ばあちゃんは寝たきりで、隣の部屋には位牌がある。おそらく母親で、命日が「3.11」。

家やお金や時間があっても、必ずしも幸せとは言えない。震災で家族がバラバラになってしまった。そんな様子を見ると、なんとも言えない。金もらっているから幸せ、なはずはない。

放射能で住めなくなった地域に住んでいた人々へのフォローはお金だけ。仮設住宅の人たちも、孤独死、自殺...

最初は放射能の問題だった。放射能が全て悪かった。「子どもを被曝させない」ことだけだった。しかし今は、もっといろんな問題が出てきた。見えてきた。

### 「保護者が元気になるには」

でも、最初の思いはぶれないように、親、母の支援をしないと。

子どもも、半分以上、甲状腺のう胞ができています。再検査の子もいる。(がんにはなっていない)

母が「子どもを被曝させてしまった」と自分を責める。苦しむ。

当時15歳の子どものが一番多い。半分以上の子どもたちに異常がある。3/15に放射能が降ってきている。その日は、県立高校の合格発表日だった。余震も凄くて、見に行くのも、入学手続きも、全部、屋外で行われた。だから、その世代に被曝が多い。

でも、「遺伝ですね、早く見つかってよかったですね」と言われる。

医師会はおかしい。怖い。甲状腺検査は「するな」。

だから、検査したい人は、別の症状ってことで、検査する。

3/11以降、共同生活で、電気、ガス、そして水がなかった。給水ポイントに車が来るのを、何時間もポリタンクを持って並んだ。そのときに放射能は降ってきていた。

小さい子を連れて、オムツやミルクを買いに行き、小さい子を連れて被曝していた。オムツ替えも授乳も外で行っていた。

後から知って後悔する。知っていて教えなかった連中は許せない。

(チェルノブイリでも隠されていた。WHOが被曝を認めているのはたった500人)

なぜ知りながら教えないのか。そして、政府の対応に明らかな問題があったのに、決して親のせいではないのに、知らずとも「なんで並んでしまったのか」と、何も悪くない母親が、自分を責めてしまっている。

いろいろなデータから、どうこう、っていう話はあるけれど、「元気が出ない」のをどうするか。

親が元気出なきゃ、子どもは出ない。親が笑わなきゃ、子どもも笑わない。

### 「放射能への不安」

(同朋幼稚園の) 保養は、夏と冬、自由参加で行っている。

当時は仕事も「保養に行く」と休めたが、今は「保養に行きます」と言うと、「まだ行くの?」と言われ、休みづらい雰囲気が出てきている。だから行く人は「保養に行く」とは言わない。

チェルノブイリでは保養を設けることが法律で定められているが、日本は法案があっても、中身とお金がない。年間20ミリシーベルト... (事故前は) 1ミリだったのに。

「保養に行ってくる」と言えない周囲の圧力。

「大丈夫だ、ってなってるでしょ? なんで行くの?」

保養に行くにあたっての質問「福島から来たと言って、差別されませんか?」

(福島ナンバーを変えたほうがいいといわれたことがある。新潟で「福島ナンバーお断り」なときもあった。避難先で差別された経験。みんな差別された経験がある。避難先で、福島から来たと言えず、孤独死、自殺も)

地域で放射能についての研修、講演会を開こうとすると、真偽はわからないが、行政が合わせるかのように「放射能は大丈夫です」という講演会を開いてくる。医療機関、学校、行政機関は「原発は大丈夫」「放射能は大丈夫」という研修をすごくやっている。子どもたち向けに「放射能は大丈夫だよ!」という研修。先生向けに「保護者が放射能を不安がったらどうするか」という対応マニュアルを配り、研修をする。「放射能が怖い、と言えない福島作り」が進んでいる。

二本松のシイタケ、61検体中61が国の基準100ベクレル以上。不安がぬぐえない。特に野菜。検査には野菜が1kg必要。

でも、「食べて応援!」みたいなキャンペーンがすごい。福島産のものを学校給食に使うと助成金が出る。同じ畑や田んぼの中でも、汚染量はまだら。何が安全かなんてははっきりとは言えないのに。

子どもに食べさせて「安心！」ってなるの？大人から食えよ。

この辺のスーパーは県内産をどんどん増やす。県外を外す。県内産は売れないのに。県内の人だって県外産を買うし、買いたい。もちろんたくさん残るが、それでもスーパーは県内産を置き続ける。なぜ？県内産を売ることに、なんか補助がある？どうもおかしい。

スーパーで売っているものは行政が測定しない。サンプル検査をしているといっても、どのようなやり方でどれだけの精度があるか、どれだけ誠意ある検査かが心配。今ではネットで買う人も多い。

みんな疲れてる。見えない放射能に。

不安がっている人をフォローする場がなくて、どんどん疲れて、開き直る。

でも、ほんとは不安なんだと思う。でも、それを直視しない。

だから、なおさら「保養」は大切。なぜなら不安を話せるから

3.11のとき妊娠、長野に避難して、福島に戻ってきて、線量計で測っていたら、近所の人に「やめてくれ、もう大丈夫なんだから」

子どもを産んでいいのか悩んだ人も多い。中絶した人もいた。「奇形が生まれる」

震災直後、気にしない人は普通に暮らした。でも、そういう人は内部被曝で引っかけた。

汚染されているものもわかってきて、内部被曝は減ってきた。

でも、老人は「コシアブラ」などの山菜もとって食べる。何千ベクレルもある。

老人会で除染もした。意識を高くしようと、時期になると食べないよう呼びかけもする。テレビで山菜、きのこは危ないとテロップで流されるが、どれほど効果があるのか。わかっているけど、「もういいや」と思っている。若い世帯との対立を生んでいる。

毎年、干し柿を作ってくれるおばあちゃん、800ベクレルあったので、被曝のことを説明し、「食べられないんだよ」と話したら、泣く…つらい。

県外から桃を送ってくれるけれど、福島の桃が一番うまいんだよね…

「福島の桃が食べたい」

老人も子どもも、これまでの味覚や文化は残っている。

心に余裕があるうちは戦えるが、今はそれが困難になっている。

検査はしてる。でも不安。

祖父母は気にしないが、子を持つ親は気にしている。しかし、「信じられないような安心」も、疲れてくると、「信じたくない」。

若い人でも疲れてしまっている、諦めてしまっている人も少なくない。

「しょうがないよ…」「考えたくない」。気にすることに疲れてしまった。

3年間突っ走ってきたから、少し、休み休みやらないと、ね。

### 「除染、除染作業員」

2年前は2件だった除染が、今では4割程度まで進んできた。

しかし削った土は庭の下に埋めるか、固めてブルーシートをかぶせて置いておくだけ。取り除くのではなく、移動しただけ。だからホットスポットができる。70センチほど掘ってコンクリートなどで固めれば、遮蔽できるがなかなかそうはできず、そのまま置いてあるところも多い。除染で取り除かれた汚染土を入れた袋が破れ始めている。別のところに貯蔵する予定だったので、3年間持てばよいとの判断で、それなりの袋だったため。

ゼネコンがアパートを押さえて、除染作業員を住まわせている。

静岡ナンバーの車が除染作業をしていたので、聞いてみると、「6次下請け」という。ハッキリ言って、アウトローな、ワケアリの人が作業している。亡くなった除染作業員さんのお骨の引き取り先がない。遺族も「あの人はもう何も関係ないです」。

国は5cm削ってその土を埋めると言っているが、実際はどれだけ削っているかわからない。ホントに削ったのか？という不安はある。

下請けの会社は、元請けから「削るのは1cmでいいよ！」と言われていたと聞いた。この話は「報道ステーション」に取材されて話した。放送できるのか？

(※編者注・この話を聞いた直後の8/30、ディレクター岩路真樹氏の自殺報道があった)

5cm削って、その土を持っていくところなんて、ない。

公から、ゼネコンが受注を取る。予算がでかいから、中小企業は入札できない。

そして環境省のマニュアルに「線量下げる」の文言はない。除染のマニュアルにない。

だから除染業者には「線量を～以下にする」という制約はない。どれだけ「線量が下がった」か、ではなく「件

数」でお金が出る。下請けは県外の業者が多く、どんどん適当になっていく。

除染後に5マイクロシーベルト毎時とかあっても、「除染した」という事実があれば行政はOKと判断。業者も「もう終わった」。どれだけ数値が高くても「二次除染」はしない。

土建屋、一年で業績「20000%アップ」の会社がある。たった7人の会社。市と癒着して、仕事を下請けに流すだけ。この話も報道ステーションの取材で話した。

大手ゼネコンの作業員は全国からアウトローな人が集まってきており、福島は、1年で、除染作業員による傷害、覚せい剤、窃盗等が270件。

警察もどうしていか、対応に困っている。警察の担当が2人自殺した。治安の悪化。

幼稚園の保護者、お母さんがナンパされる。「バイトしませんか」除染作業員向けの風俗に。需要が増えている。

3.11以降、儲かる仕事がある。アパート、弁当屋、旅館、パチンコ、風俗。

### 「つながって生きる・・・福島とフクシマ」

1300万トンの汚染土の中間貯蔵施設をどこにするか。

福島県が受け入れ、黙っていれば日本の経済は動いていくという認識。

「福島が騒がなきゃ経済は豊かになる」…

敵は何？

最初は「放射能」だったし、これからもそれは変わらないだろうが、今は人間のドロドロとした部分、社会の仕組みが目立つようになってきた。

「こうやって儲けていくんだな」という仕組み。

それを見えないようにする現代社会。

誰かの犠牲の上で成り立つ豊かさ、平和。

「命」が見えにくいシステム社会の中で生きている…。

8割～9割の人のために1～2割の人の苦しみに目をつぶる社会。

「世界がつながっている」ということを感じられない社会。

実はつながっている。

世界は繋がっている、関わり合っているということを感じてほしい。心が痛むことが、生きることの喜び。そんな生き方をしたい。福島と繋がっていることを感じて欲しい。

震災後、最もラジオでのリクエストが多かった曲はやなせたかし氏の「アンパンマンのマーチ」だった。最初は子どもたちのために親がリクエストをしていたが、その曲に大人が励まされ、勇気づけられた。

アンパンマンのマーチには「そうだ 嬉しいんだ 生きる喜び たとえ胸の傷がいたんでも」という歌詞がある。アンパンマンのマーチの本当の歌詞は、もっとドロドロしていた。

やなせたかし氏の弟は特攻隊で亡くなった。しかし自分は生きている。空腹のきつき、心が痛い、それが生きる喜び、という。

人と人が出会うと心が動く。画面やネットの「知」では動かない。

震災後は心が痛むことが多くなった。自分自身が苦しんだことで、見えてくること、感じるができるようになった。

よく広島や長崎はカタカナで表記される。そしてフクシマもカタカナでの表記を目にするようになった。しかし「フクシマ」とカタカナになると、何か違う。

福島に住む人、そこに生きている人たちにとってカタカナでの表記などなく、福島は福島でしかない。ヒロシマもナガサキも、広島と長崎。フクシマじゃなく、福島。

カタカナ表記は、結局「外から見た人たちの表現」。

イキイキと生きたい！！

それにはつながること。そこには痛みもある、それでも。

### 「保育として」

保育者の意識、苦しかった。「外出れない」先生に言うのは子どものストレス。

園生活ではできるだけ子どもたちにストレスを感じさせないようにしている。

「ダメ！」と言わない保育をする…花はつめないけど、他に気持ちが行くような。

「子どもたちに対する罪悪感」

辞める人もいた。のびのび遊ばない。遊びは絶対的に足りていない。

子どもの書いた七夕の短冊「外で遊びたい」「放射能なくなれ」。

きつい。

新しく保育者になる人は、強い思いがある。

先生にもストレス。

3.11以降、保育者を目指した人は、「意思」を持った人。

でも、現場で苦しんで辞める人もいる。

がんばっている園もあるが、つぶれる園も実際ある。

### 「遠い自然」

子どもが自然を怖がってしまう感性。

土を触るな、花を摘むな、虫つかむな…自然との関わりを「ダメ！」と言い続けてきた。

子どもが、花を摘んで家に帰ってきて、お母さんの顔を見て花を隠す。

本来は花、土、虫など小さな身近な自然から様々なことを感じ取って成長してきた。逆になってしまっている。まずいな…と思う。

結果、自然そのものがダメなもの、危ないもの、怖いものであるように感じている。自然体験を全くしていない子どもたちの今後の感性が心配。

震災前に、命の教育、自然と触れ合う教育を行いたくて、子どもがかかわる畑や田んぼは整備して無農薬にし、裏山の杉林を広葉樹の雑木林にして「むしむしランド」をつくっていた。完成した矢先に震災が起り、外で遊べなくなってしまった。

「命の教育」自然と出会う教育の園を取り戻したい。子どもの命が自然に触れることを求めている。

汚染されていないところに触れ合える機会を。

「教育そのもの」の話ができるところまでできていない。「安全」だけでも、必死だった。やっと、そろそろ…

園庭は最初、3マイクロシーベルト毎時（場所によっては30マイクロシーベルト毎時）あった。現在は0.1マイクロシーベルト毎時ほど。自分たちで除染して、年間1ミリシーベルトにした。しかし、敷地内だけやっても周囲はなかなか進まない。結局、おとしどころはどこにするかということになってしまう。

虫がとりたい。キャンプに行きたい。そのレベルに行けない。でも、ちょっとずつ取り戻す！

エネルギーのかたまりの子どもが、発散できない。

感じる機会も少ない。言葉じゃない。

美しいもの、楽しいもの…やはり「自然」なんだ。

それに触れられない苦しさ。

目に見えないことをどのように伝えるか？やっぱり経験からしかない。実体験で覚えることから。

理屈じゃない体験を取り戻す。

答えはわからない。もがいている。

「子どもを被曝させない」これだけはぶれない軸にして、これからも悩み続ける。

そして何事も始めることが大切。

裏山をまた遊べるようにする！

クヌギ、クルミ…「もう一度切ってやり直します！」

## 2 飯舘村ミニ視察 (8/27)

2年前2012年10月には飯野町に避難している飯舘村立2幼稚園を訪問した。当時は飯舘町内には立ち入ることができなかったが、今回は立ち入り禁止は一部解除されている。居住制限区域及び避難指示解除準備区域については、立入可能。

二本松をあとにして、飯野町、川俣町を経由して飯舘村に入る。小雨の続く12号線を走行。

入ってすぐの避難指示解除準備区域小にある小公園のモニタリングポストは0.229マイクロシーベルト毎時を示していた。

道沿いに走ると、田畑、道路わきの林等の除染作業が延々と随所で行なわれている。田畑は重機で表土を剥ぎ、道路脇の林は除染作業員の手作業で落ち葉等が集められている。それらは黒い大きなポリ袋に入れられ、膨大な量が何箇所にも集積されている。進むにつれ、事故前は田畑であったと思われるところがまだ手付かずのまま、広大な面積で草が生い茂っている。

ドライブインや、DIY店は廃墟と化して営業していないか、除染施設に使われていた。農協は営業。

途中下車して、林道に。1.42マイクロシーベルト毎時。

市街地は通行する車両はあるが、除染作業員以外、人の生活の気配はない。

## 3 川俣町 (8/27)

### (1) 町内視察

午後3時25分、hand to hand project kawamata 代表の今泉君枝さんと川俣高校前にて合流。午後5時より川俣町役場会議室にてお話をする前に、町内を案内していただくことになる。途中、会員の高橋長さんと合流する。

#### 中央公園

川俣町の町並みが望める小高い丘の上に作られた中央公園の駐車場に車を置き、徒歩で園内を訪れる。全施設除染は完了済みとのこと。

園内の芝生の広場に設置されたリアルタイム線量計は0.252 マイクロシーベルト毎時を示していた。

以降、今泉さんのアドバイスで公園内の各所を持参したRADEX1706で計測していく。同じ広場の隅に設置されたベンチは0.42 マイクロシーベルト毎時。園内のウッドチップで舗装された路面は1.11 マイクロシーベルト毎時。野外ステージの客席(3段)の1段目の足元部分は1.22 マイクロシーベルト毎時。滑り台など新しい固定遊具が設置され、新しい土が入れられた広場は0.48 マイクロシーベルト毎時。その広場のすぐ下の民家横の空き地では除染作業が行なわれているのが見下ろせた。

#### 除染した放射性廃棄物の仮置き場

中央公園をあとにして、途中高橋さんと合流して、放射性廃棄物の仮置き場に向かう。道路脇で座り込んで談笑している下校途中の中学生。「ああいう姿を見ると心が苦しくなる」と今泉さん。

放射性廃棄物は各地の仮置き場→中間貯蔵施設→最終処分場という段階を経ることになっているが、現在も仮置き場にとどまっている。

雨に洗われて緑が美しい里山の道路を進んでいくと、やがて放射性廃棄物が入れられた無数の黒いポリプロピレン(1つがφ1100×H1100、容量1.0 m<sup>3</sup>)の袋が積み上げられ、広大な谷を埋め尽くす、今まで見たことの無い景色が目飛び込んでくる。すでに満杯になったところには「立ち入り禁止」の看板があるので、現在搬入中の場所に立ち入ってみる。もちろんこの袋は放射線を遮蔽しない。今泉さんや、高橋さんは普段はあえてここに来て、放射線に近づくことは無いと思う。日常的にここで生活し続けている川俣の人たちにとっては、被曝の積算量を減らすことが重要だから。この日限りのわずかな時間被曝している我々とは意味が違う。

ここは一応人の居住する地域とは離れているが、飯舘村はもちろん、二本松を発ち、飯野町、川俣町までの至る所に仮置き場へ移す前の廃棄物が積まれ、青い作業用シートで無造作に覆われていた。その横を子どもたちが下校する姿があった。

## 3 川俣町 (8/27)

### (2) hand to hand project kawamata 代表 今泉君枝さん、高橋長さん談などより

#### 1 Hand to hand project Kawamata とは

福島県伊達郡川俣町にあるNPO。

会の目的は、子どもの被ばく量をなるべく低くする為の活動を継続的に行う。また、子育て中の世帯にむけて心身ともに寄り添った支援活動を行なう。

その目的のために、次のような活動を行っている。

(1) 被災した子ども達への心のケアを目的とした支援活動

(2) 現在子育て中の世帯や、今後、子どもを産み育てる年代の方々にむけての放射線に関する学習会(講演会)(以上、ホームページより)

#### 2 川俣町・福島の実状

浪江町、飯舘村に隣接する川俣町は、東京電力福島第1原発事故に伴い町の一部(山木屋地区)が計画的避難区域に指定された。平成25年8月8日に「居住制限」「避難指示解除準備」の2区域に再編されている。

子どもの室内あそび場が他の市町村にはできているのに川俣町にはできていない(訪問時)。(平成26年9月に室内あそび場がオープンした)

今泉さん(会の代表)の子どもは、鼻血はでていない。でも、鼻血が出るという子もいる。結局は本当のところはわからない。

甲状腺がん 104人、地域差なし?そんなことないだろ!と思う。検査のやり方に疑問がある。

避難先で差別される。福島ナンバーの車で避難した時に、「放射能がうつる」と言われた。

#### 3 感覚のずれ・心の分断

被災したばかりの頃は、住民は皆同じように放射能を恐れ、気をつかい、除染、保養、避難と、放射能対策をしてきた。しかし、心配し続けることに疲れてしまった人々、もう安全だと思いたい人々が増え、表立って放射

能対策をやりづらくなってきている。

放射能の心配をしていると「まだそんなことしているの？」と思われるようになってきた。除染が済んだ公園でもまだ線量が高いところがある。そんなところの放射線量を測っていると「除染が済んだ公園の放射線量をもう一度測るなんて今泉さん（会の代表）くらいだよ」と嫌みを言われる、それが現在の町の雰囲気。

公園の子どもが歩く道、地面にじかに座るようなところでも放射線量が高いのだが、役所は一度除染を済ませたらそれでOKというスタンスで、現状を訴えても動いてくれない。

「どうすることもできず、ここで生きていかなければならないのだから、『ダメだ』『危険だ』とはこれ以上言わないで！」という気持ちになってきている人が多く、本音で話すのが難しくなっている。

保養に行きたくても会社や周囲の理解が得られない、「まだ保養に行くの？」という感じ。

そのような状況なので、同じ思いで集まるようになったグループであっても、自分の思い全てを話すのは難しくなっている。一対一で話す時でない、なかなか腹を割って話せない。

しかし、根底には程度の差こそあれ放射能に対する意識はあり、水を選んだり野菜の産地を気にしたりと、それぞれ生活の中に表れている。表に出さないように、こっそりと対策している人もいる。

子どもに近い母親と、社会に近い父親で、放射能に対する感覚にズレがあることが多い。夫婦で同じ考えというのは稀になってきている。

川俣町内に、計画的避難区域に指定された地区（山木屋地区）と、そうでない地区とに分かれてしまい、町が分断されてしまった。

#### 4 現状への対応

Hand to hand project kawamata では、土日の一泊二日で山形へ保養に行く（大人16名、子ども17名で参加）など、保養を企画したり、親子で楽しいひと時を過ごしながらか、同じ思いを持つ親同士が交流したり情報を共有したりする場をつくったりしている（クスクスBOX）。

「行政がダメだ」と思いながらも、手を取り合っていないと実現できないこともある。今年、サッカー部20人を北海道に連れて行くことができたが、これは行政の協力があってのこと。先述のクスクスBOXも、県や町の後援を得ている。

このように、行政に協力をしてもらって実行していくのが近道で現実的なのだが、会員の中では意見が分かれている。町と協力してやっていくべきなのか、孤軍奮闘してでも自分たちの高い理想に向かっていくのか。

市民団体がつながり、協力していくことで保養などが実現できている。でも本来なら国や自治体が主導でやるべきなのに、という思いはある。

「逃げればなんとかかなる」わけでもない。避難した先での生活を考えると、そんなに簡単には避難できない。

室内あそび場が他の市町村にはできているのに川俣町にはまだできていない。（訪問時）

（※編者注）その後、室内あそび場が完成したが、hand to hand project kawamata が陳情したようなものができたのかどうかは不明。

##### 〈参考1〉

##### hand to hand project kawamata ホームページより（役所への陳情について）

『26年度陳情書は「採択」されました。

下記の内容で川俣町側からの聞き取りを終えてから、12月議会への陳情書として再度提出いたしました。ところが、25年12月議会は一日も開かれず閉会、提出した陳情内容についての質疑応答はされないままになっていました。

26年2月の議会に持ち越された陳情内容は無事に「採択」となり3月31日に文書が届きました。

しかし、今建設中の「川俣町の屋内遊び場」はこの陳情内容に沿うものではなく、全く別のものであるようです。

我々は、今後も未来ある子ども達をまもるための、放射線防護を意識した遊び場建設をしていただくように陳情し続けていきたいと考えています。

平成26年6月13日』

『去る11月1日、川俣町役場企画財政課の依頼により、川俣町の子供の屋内遊び場についての聞き取りが行われました。

当会は、過去二回の川俣町議会に対する陳情書にて、緊急に子供の遊び場を建設してくれるよう要望していましたが、「採択」はされたものの一向に建設する様子が見られませんでした。

小さな子供を抱えるお母さん達の悩みは深く、毎日の遊び場が無いこの町での育児を考えると「なんとかなら

ないものか・・・」と感じておりましたが、この度、企画財政課の担当者からの聞き取りを依頼される事になりました。

子供の遊びには五感を養うことが不可欠であり、また「川俣町のこれからを担う大切な子どもたちを放射能被ばくから守る」そのことも兼ね備えた複合施設の要望書であり、汚染された土壌を完全除去をしてもらうのは当然です。

この日の数日後には、川俣町議会委員と企画財政課が我々も含めた各子育て団体からの聞き取りを共有し、今後この「屋内遊び場」をどうするのかの検討委員会が行われるとおっしゃっていましたが、その後の連絡は一切ありません。

当会でまとめ、企画財政課に提出した要望書は以下の内容です。

今後の企画財政課からの回答をご期待してください。

追記・・・別記3については本人の了解を得て、メールの内容を資料として添付いたしました。

平成 25 年 11 月 1 日

川俣町役場企画財政課  
担当者様

hand to hand project kawamata

子供の屋内遊び場に関する要望書  
このことについて、下記の通り要望します。  
記

- 1 別記 1 要望書
- 2 別記 2 「保護者の放射線防護、学び、支えの場」の事例
- 3 別記 3 「冒険遊び場」から見えるこどもの遊びの様子
- 4 別記 4 児童憲章 (全文)

<別記 1>

この度、過去二回提出の川俣町議会に対する陳情書に記載した『子供の屋内遊び場』の意見聴取に際し、当会としてまとめた内容は以下の通りとなります。

屋内遊び場は、子供の成長段階に応じて乳幼児など一定の発育段階には適しているが、遊びを必要とする段階の子供すべての代替にはならないものである。

しかし、これまで二回の陳情書にて早急に屋内遊び場を建設するように要望したのは、震災後安心して自由に外遊びができない環境になってしまった為である。

過去二回の陳情は、郡山ペップキッズをイメージした屋内遊び場と福島市に建設されたサンドパークも兼ね備えた屋内遊び場の要望であったが、川俣町として緊急に対応していただけなかったのは非常に残念である。

震災直後に生まれた子供は、すでに二歳七ヶ月になる。

子供の育ちには個人差はあるものの、運動機能が発達し社会性も伴い始め、友達との外遊びに喜びを感じる時期である。しかし、震災による放射能汚染という突然降りかかった『負の遺産』により、それらを体感せず今日まで過ごしてきた子供も少なくない。

乳幼児のこの大事な時間はもう取り戻せないが、この二歳七ヶ月の子供が、今後成長して行く過程で、自然溢れる川俣町の住民でありながら思いきり身体を動かすことが出来ず、五感を養うことが困難な今日、行政は毎日でも放射線量が低い場所への移動保育を早急に実施すべきである。

また並行して、川俣町を支える未来ある子供の健やかな成長を願うならば、人工の屋内遊び場でありながらも、自然が溢れ震災前の川俣町を彷彿させるような施設を建設してほしい。

さらに、私達に深く降りかかった放射能をこの先何十年も抱え、防護して過ごさなければならない事から、保護者の放射線防護、学び、支え合いの場となる複合施設を兼ねた屋内遊び場の建設を以下の通り要望する。

- 1、川俣町で計画している屋内遊び場の設計プロセスの理念とは何か。

当会が要望する”子供の遊び、保護者の放射線防護、学び、支え合いの場となる複合施設”の理念に沿った内容の施設とすること。

- 2、建設計画の進捗状況を確認したい。また、有識者と町民が入った協議会は存在するのか。

行政は子供の発育や行動について一定の知識あるものを担当者として配置すること。(乳幼児、幼児、児童、生徒などの保護者、若しくは経験者が望ましい)

さらに、子供の目線から見えてくる課題に期待し、児童会、生徒会の児童や生徒の聞き取りもすること。

今後は、今般遊技場設置の工程において協議会の意向を重要視していくこと。

3、屋内遊び場予定地は、空間線量ではなく土壌計測を隈なく行う。また、セシウムとヨウ素だけでなく、その他の核種の分析を町民に公表すること。

空間線量に関しては、ホットスポットファインダーを導入しながら細かく計測し、町民に公表すること。

4、放射線防護の観点から、建築物はコンクリート造りにし、さらにガラス窓などには放射線の遮蔽シートは必ず貼ること。

5、屋内遊び場は、自然の恵まれた環境の代えには全くなならないものである。

従来の遊び場は、空気、土、水、草、木を自由に感じ、触ったりするものであるが、それが出来なくなったことは子供の感性を養うことが出来なくなったということである。

子供の成長に長時間に渡る偽物や代替は不必要であることから、本物の木の葉、木の実、小枝、石、草を安心して自由に触れる環境が望ましい。

また、造形したものを誰にも気兼ねせず作っては壊し、壊してはまた作り上げられる環境が望ましい。(大人の介入がない自然な状態)

5に関しては、発達段階に応じて年齢制限を設けて、事故や怪我の防止をする。

6、通常、砂場の土は日光により除菌される環境にあるが、冷暖房完備で日光の当たらない屋内遊び場の砂場では衛生面の問題も発生している。使用する土の種類によっては、遊んでいるうちに粘り気が出る性質もあるので土選びには十分気をつける。

最低でも、ガラス越しに日光が当たる場所に設置し、土の入れ替えも定期的に行うこと。

7、運動不足予防に出来るだけ体を動かして遊べる遊具を完備すること。

(例、大型のトランポリン、空気を入れて膨らませた巨大なマットの上を走ったり出来るもの、ジャングルジムや滑り台、ロッククライミング、さらに自転車の補助輪を外す練習が出来る小スペースなど。)

7については、5と同様に幼児と児童のスペースを分け、事故や怪我の防止をする。

8、既存の屋内遊び場は、基本的に未就学児童を対象にしているところが多いが、当会の要望する複合施設には、小中学生、高校生も安心出来る場所で十分に身体を動かせる人工芝の運動施設は勿論、勉強したい人が静かに机に向かえるスペースを完備した図書館の併設もすること。施設は年齢制限、利用制限なく誰でも利用可能とし子供だけではなく、大人も気楽に出入りできるようにすること。

9、複合施設内は、2011. 3. 11を彷彿させる事態が万が一起こった場合や、あらゆる災害に全町民対応可能な非常食等の備蓄の出来る建物(核シェルター)を兼ねること。

10、1~9の項目をすべて取り入れても、震災前の元の生活を取り戻す事は困難であることから、町で実施しているのびのびリフレッシュ事業の延長は勿論、リフレッシュ事業自体を子供のいる家庭に限定せず全町民が対応可能な事業への移行、さらに避難の選択肢を行政が準備すること。

以上、将来、川俣町を担う子供達がすくすくと成長する為に不可欠な要望です。

何度も申し上げますが、二年七ヶ月はもう戻りません。目に見えるモニタリングポストの近辺だけ放射線量の公表をするのではなく、子供の生活環境に目を向けた放射線量の計測と、子供の居場所に考慮した生活圏の土壌測定をした上で、川俣町の子供の遊び場を中心とした保護者の放射線防護、学び、支え合いの場建設の要望とします。

hand to hand project kawamata 一同

## <別記 2>

『保護者の放射線防護、学び、支え合いの場』の事例

①放射線に関連する講習会などが開催される場合には、そのチラシやポスターを配置して誰でも情報を得られるようにする。

②保養の情報に関しても同様に、掲示して情報を共有できるようにする。

③放射線に関連する講習会など開催して欲しいものを要望できる意見箱を設置する。

④併設される図書館には、簡単な物から高度な物まで誰でも放射線に関して学べるように文献を充実させる。

## <別記 3>

10月27日の「「こどもが主役」の遊び場を考える」の講演会無事終わりました。

内容をご報告させていただきます。

まず、天野さんより、「冒険遊び場」とは何かというお話しをしていただきました。

後で資料を読み返してみて、以下わたしなりの解釈をしました。

ケガやケンカなど自分で責任をもつ(子どもに任せ大人は見守る)子ども主体の住民運営による遊び場のこと

です。

なので、いわゆる遊具はありません。

郡山市などにある室内遊び場は、子どもの運動量ということではたいへん意義あることですが、屋外での遊びはそれと一線を隔しています。

というのは、遊びの根本は「やりたい」という動機から生まれるものだからです。

鬼ごっこ聞いて、皆さん、遊びだと思いませんか？

ほとんどの人が遊びだと思うでしょう。しかし、中には思わない人もいます。

それは、やりたいと思わないからです。

やりたいと思わないことは遊びではありません。

やりたいと思うことをしている時、つまり遊んでいる時はその子が主役になっているのです。

つまり、遊びは「命」そのものということができ、その子の唯一無二の世界と言えます。

では何が子どもの「やりたい」を引き出す環境なのでしょう。

それは、壊せるものがどれだけあるのか、ということになります。

創造の前提にはどれくらい壊せるのかということがあるのです。

壊せるものがある、ということは、自分の世界を創ることができるということです。

壊せないものに取り囲まれた現代の生活は、創造力を奪います。

人口の造形物は完成品＝壊せないものだからです。

また、遊びの中で、子どもはルールも作っていきます。

大人の世界ではルールは守るものですが、子どもの遊びの世界では、その子が遊びに加わるにはどうしたらできるのかを考え、ルールを変えていきます。

この遊びのルールではあなたが遊べないよ、というのと、あなたと一緒に遊ぶためにはこういうルールにしよう、というのとどちらがいいのかわかると思います。

また、室内遊びは整った環境だけに、子どもの五感を奪います。

いやだな（ヌルヌル、ベタベタ）という感覚を持つことがないのです。

そして、外での遊びは体温調節など、身体が環境に対応できるようになります。

以上のように、屋外での遊びは子どもにとってたいへん重要な意味を持つのです。

次にホットスポットファインダーによる計測結果を福島の現状を交えてお話しいたしました。

モニタリングポストの数字は正しいけれど、そこからほんの少し離れたある地点を計測すると数字が変化していました。

除染しているところと漏れているところが明確になります。

今、お試し期間ということで、依頼があった、幼稚園保育園さんの周辺を測っているところです。

園庭は除染されていても、今まで続けてきたお散歩ができないので、どのコースだったらできるのか、道の右なのか左なのか…。詳しく測定しています。

また、園庭もホットスポットは本当にないのか、も。

飯坂町茂庭にできたプレイパークも計測してきて、50センチの位置ではほぼ、0.1 マイクロシーベルト前後であったことから、福島市内の除染が進んでいるところと変わらないということがわかりました。

終了後活発な質問も出ました。

砂場は低いけれど、周辺の草むらは少し高め、どうしたら、という質問に、ペットボトルを並べるという遮蔽方法があることをお答えしていました。

講演会を終えてみて、子ども達にとって何ができるのか、わたし自身改めて考えることができました。

子どもの成長は待たなし…。

それぞれの判断、価値観があっていると思いますが、天野さんがおっしゃっていたように、「一番ものを言わない子ども」のために自分ができていることを精一杯していこうと改めて思います。

そして、今の子どもだけでなく、未来の子どもたちへの動きも必要ですね。

福島市内に安全で子どもが思いっきり遊べる冒険遊び場を作りたいと思った大人が会場に少なからずできたことは、すぐには実現できないにしても、とても大切なことだとわたしは思いました。

NPO法人青空保育たけの子 辺見妙子

(本人の許可を得て、添付資料といたしました。)

## <参考2>

hand to hand project kawamata くすくすBOXvol.3 報告集より

はじめに（今泉君枝さん）より抜粋

2011年3月11日の東日本大震災での福島第一原子力発電所の爆発による放射性物質放出事故により私たちの生活すべてが不安材料となりました。除染は推し進められていますが、自然に囲まれ緑が豊富である場所での子育てに関しての不安感は拭えぬ毎日です。野山を駆け巡り道端の草花を摘む事、此処彼処に落ちている石ころを拾ったり木の棒で地面をキャンパスに絵を描く事、土埃にまみれながら駆けっこをする事、泥を丸めて泥団子を作ったりする事、家庭菜園で収穫して美味しく食べる喜びなど、その環境こそが何にも代え難い贅沢な生活だったことを震災後に強く感じています。

#### 4 福島駅イトーヨーカドー食品売り場

##### 2012年との比較

川俣町をあとにして、午後7時半ごろ福島駅前のビジネスホテルにチェックイン後、すぐにイトーヨーカドーの食品売り場に向かう。2年前の2012年10月にも訪れていたのだから、それから2年後の変化の様子を見してみる。

2年前は魚類、肉類、野菜・果物などほとんどの売り場のいたるところに放射能対策に関する情報を提供するパネルが掲示されていた。

今回は米と肉類についてのパネルを見つけたが、それ以外のものは見つけられなかった。2年前に比べるとずいぶんすっきりとした感がある。

そして「福島の豆腐」「福島の納豆」「福島の牛乳」「福島産とまと」「福島産ピーマン」など地元食材の表示が多くを占めていた。それらに放射線情報は示されていない。

#### 5 いわき市 郷ヶ丘幼稚園（8/28）前山成子園長先生、主任先生、保護者（元保護者含む）の皆さん談より

##### 2011. 3. 11

昼寝中に揺れが起きる。

「あれ？なんかゆれてない？」

飛び起きて、まず全員外へ避難した。避難して後、またすぐに強い揺れがきた。外はとても寒く、揺れが落ち着くと保育者が部屋へ上着を取りに行き、外で着替えをした。

年中、年少はどちらかといえば現実を把握できず楽しんでいる様子で笑顔もみえる。しかし年長児のひとりが泣き出したことで、一気に子ども達が泣き始めた。少しでも子ども達を落ち着かせようと考え、とりあえず外で、おやつのおにぎりを食べた。

この時点でテレビもラジオもつながらず情報がない中、職員も不安を感じながらも子どもを励まし、安定を装うしかなかった。

15：40に降園のバスを出すか悩んだが、出してみることに。津波の影響がない内陸に立地しているため、バスもなんとか子どもたちを送り届けることができ、18：30に園に戻った。残留している園児の保護者の中で、看護師のお母さんはなかなか連絡が取れなかったが、19時半には無事全員変えることができた。

その後20時に職員全員を家に帰す。それぞれの家庭の状況が判明しない状況であるが、3月14日（月）に職員は集まることを確認し家路に着いた。

9時過ぎに津波の被害を知った。地震による津波なんて意識は全くなかった。バスの運転手さんの家は腰まで浸水し被災したことがわかったが、園児に人的な被害がないことも判明し安堵した。

この時点で3月11日はこれで終わると誰しも思っていた。また原子力に対して無頓着でまさか爆発するとは思っておらず、なにがなにかわからない状態だった。

##### 2011. 3. 12

午後には復旧かと思ったが、そのころ福島第1原発1号機水蒸気爆発。

12日からいろいろ情報が出るようになったが誤って危険区域に「いわき市」のテロップが流れたため、30万都市が混乱に陥った。そのため、被曝を避けるため、少し遠くまで行ってはみるが居場所もはっきりしないため、結局また戻ってくるしかなく、ガソリンもなくなるという状態に。ガソリンスタンドは大渋滞でとてもガソリンが入られるような状態ではなかった。ガソリンがなくて逃げたくても逃げられない。

その経験から今でもガソリンが半分になったらすぐ満タンにするクセがついている。水は自衛隊が給水車で配りに来ていた。子どもを家においていくこともできず、一緒に連れて行った。マスクもせず6時間も並んだ。結果被爆させてしまった。

##### 2011. 3. 13

結局市の判断で地区を限定して避難地区を指定し、混乱は収束していった。最終的にはいわき市北の浜地区は

津波被害が深刻であり、原発20キロ圏は避難指示が出た。危険とか安全とか情報が錯綜したことで混乱し、不安が増幅した。次第に避難する人も増えていった。

### 2011. 3. 14

14日に職員が集まり子どもたちの安否確認を行い、全員の無事が確認された。今後の方針について打ち合わせを行い、休園体制（解除時期未定）を取ることに決めた。

### 2011. 3. 15

この時期から、いわき市全域で避難が広まる。駅前にはゴーストタウンになった。残った人もいたが、スーパー1軒開けたら2kmの列が発生した。「列を抜かした」との争いが起きていた。

会津の病院に骨折治療のため受診したら、いわき市出身というだけで受け入れられず、スクリーニングを強要され汚れ物扱い。当初いわき市民が差別された。

事故直後はみんなで放射能について話をしていたが、徐々に受け取り方に違いが生じてきた。

食べ物に対して、「気をつける人」「気をつけない人」の二極化が顕在化した。また気をつける人の中でも、それぞれ基準や気にする点が違うので、安易に口には出さない状況になってしまった。

「日常あつての放射能」なのか、「放射能がある日常」なのか。「気にする人」が傷つきやすい状況が今も続いている。

### 2011. 3. 30

いわき市教育委員会が、市内の公立学校については4月6日から新年度を開始すると発表した。

除染対策、内部被曝対策もないまま、根拠のない安全判断を行ったまさかの通達と感じた。いわき市や教育委員会は放射能は危険という考えを払拭しようと進めていた。

幼稚園も保育を始めることにしたが、家庭の状況や放射能に対する考え方など様々な事情があるので、職員にはそれぞれの状況があるので辞めてもいいと話した。

### 2011. 4. 6

入園式。

新入園児の半分くらい出席した。入園式だけ出て翌日から欠席の子もいた。

開園当時はマスクをかけ、帽子をかぶり、長袖のジャンパーを着ての登園だった。

放射能の対策のため室内除染を行い、カーテンを処分、室内の拭き掃除を行った。

### 2011. 5

ガイガーカウンター（ロシア製）を入手。

保育を再開したが、外遊びもできない、泥遊びもできない。つらかった。

まったくの日常なのに。窓も開けられない。どう保育すればいいのか？悩む日々であった。

地域の線量を計測し、安全なところと危険なところを調べた。

そんな時、中部大学の武田邦彦先生のところへメールをした。この頃武田先生へは一日2000通程メールが届いていたそうだが、件名に「いわき市の園長です」と入れたところ、すぐに返信が来る。

そして一週間後には、放射能の知識、対応などについての講演を開いてくれた。チケットを買うために幼稚園の前に人がずらっと並び、あっという間に完売だった。

ひまわりが線量を下げると聞いたのでひまわりの種を片っ端から蒔いたが、あまり効果なかった。ひまわりが枯れた後、表土洗浄を保護者と力を合わせて行った。

除染を行う当日台風が来て、「中止かな…」と思ったが、あるお父さんが、「今やらないでどうする」と声を出し、台風がくるなか、夜までかけて行った。東電に勤める保護者がいた。誰よりも早く来て黙々と除染作業に取り組み最後まで行ってくれた。申し訳ないという気持ちがあったんだと思う。

しかし、なかなか線量が下がらず、避難している園児も多く、経営的に給料が出せない状況が続いた。そのため、調理士や時間給の先生には休んでもらい、園長も給食を作った。

その後の夏祭り、運動会は室内で行った。夏祭りでは「I LOVE YOU & I NEED YOU 福島」が流れ、みんなで号泣した。運動会では年長のみ外で走った。年少、年中からは「いいな〜」という声が聞こえた。年長の子どもたちは本当にいい顔で走っていた。

10月になっても外には出してあげられなかった。しかし、小学校は線量が高いのにも関わらず、時間制限つきで4月から外に出ていた。

### 2011. 10

砂場の砂を島根県の支援者から送ってもらい総入れ替えした。

現在

今では普通に泥遊びも出来るほどになった。食べ物は栃木県や茨城県産より逆に福島県産のほうがモリタリングされているものが多い。遠方から買うと届く頃には傷んでいることも多くあった。クール宅急便などだと送料のほうが高くなってしまいうこともあるが仕方がない。そのため給食費だけでは給食を提供できない状況であった。

食べ物に関しては病的に心配する人もいる。しかし、食べ物は気にしても、近所の公園で遊ばせたり、子どもをもっと歩かせたりして欲しいという要望もある。

子どもたちの園生活上での被曝について、懇談会では「これだけ被曝するかもしれないけどよいか？」と正直にお伝えし、それを了承してもらっている。

これまで地域の自然を最大限利用する保育を行ってきた。それができない状況が続いた現在、子どもたちの動体視力、体力が落ちてきている。

山や自然で遊べないことのもどかしさが募るが、線量を調べ、対応を話し合い、お散歩に行けるようになった。単純に外に行けるといふ感動が今も続いている。

しかしこれまで通りではない。アスファルトの上は歩けるけど、デコボコの土の道はまだ線量が高いホットスポット的な場所も多く、入ることができない。ザリガニ・バッタ、あとイナゴを食べたりしていたが、今は触ることもできない。

何より悔しいのは、体験の中で育まれるものが、今の状況ではできないのが現状。保養に行って改めて虫捕りの楽しさを感じた子どもたち。

しかしそれはいわきではできない。ダメだということしかできないが、少しぐらいとさせてしまった時もある。そんな時はやらせてしまっていたという罪悪感が残る。とても辛かった。

苦しい状況の中、保護者にとっても園に来れば、声を出せる。話せる、共感できる場だった。幼稚園が心のよりどころだった。

幼稚園としては「郷ヶ丘に帰ってきてほしい」「郷ヶ丘の今を知ってほしい」という願いから、避難した人たちの避難先を把握し、毎月お便りを送り続けている。厚みが出るので送料もバカにならないが、避難した人は「逃げた」と思われているという葛藤を抱えていたため、そのジレンマを和らげてあげたかった。

避難区域から避難してきた人たちは一人につき月 10~15 万円の保障がでている。しかしいわき市民にはないので、よく思わない人がいるのも事実。お金があっても帰る場所が奪われ大変な思いをしているのはわかっているのに…。また保障や補助金などで格差がうまれてきている。避難地域から転園してきた園児のうち、保育観の違いから、2 家族退園していった。

避難訓練の回数は年 2 から 3 回だったのが増えた。何かあったらとにかく外へ出るということを意識している。訓練日時は職員にも知らせず行く。避難のマニュアルは保護者にも配り、緊急時の対応を共通で理解し動くことができるようにしている。

備蓄品は毛布があるといい。そして何より一番大切な備蓄は、震災前からあった「園への信頼感」であるということに気付かされた。(記・松尾琢二)

## 震災

### 6 いわき市 ほうとく幼稚園 (8/28) 生駒恭子副園長先生、保護者(元保護者含む)の皆さん談より

長い揺れの後、全員が外に出て、駐車場にて待機。しばらくすると送迎のバスが戻ってきた。卒園児の親も手伝いに来てくれたが、その時「津波が来る」とのしらせがあった。川が逆流し、サイレンがなり、爆発音が聞こえ、ヘリコプターが飛んでいる。ただことではないことを感じる。揺れが落ち着いてから全員山の上へ避難した。子どもたちを遊ばせたり、おやつを食べたりしている間に、親に連絡をした。近所の人も幼稚園に避難してきた。炊き出しも行った。タンクの水は 220 リットルあった(およそ 220 人の 24 時間分)。

翌朝、職員を家に帰し、園は休園の連絡をした。13 日で避難先なども含めて所在確認が終わった。

いわき市の幼稚園連盟が被災した為、ほうとく幼稚園を対策本部とし、各園に連絡をした。

震災を受けたのはみんな同じだった。しかしそれぞれで被害の中身が違った。豊間地区では津波により 100 名程の方が亡くなられた。

### 放射能

震災後、まずなにが欲しいのか。すると「線量計」という声が多かったので、文科省に線量計「はかるくん」の貸し出しを依頼したところ「学校ではないのでダメ」という回答がきた。そのため外部の先生にお願いをして手配した。

「バスターズ」と名づけて、OB、保護者が集まり、園内の除染を行った。

2011 年 5 月中旬。震災後、初めて子どもたちと外に出るときは、幼稚園の裏山へ親子でのお弁当遠足にした。市

外の遠足も考えたが、3歳まで楽しめるようなところがなかなか見つからず「これだったら山でいいや」となった。放射線の数値を細かく測ってまわり、数値は保護者にも報告をした。それでも気になる方は線量計を貸し出すので測ってください、という対応をした。また遠足時、子どもたちが何か拾ったりしたら「きたない!」「ダメ」という声掛けは避けて、「またあいにこようね」など声をかけるようお願いした。またしっかり手や体を洗ってあげるようにも話をした。子どもだけではなく、親も良い顔をしていた。

それ以降、週の中で時間を決めて、外へ出て遊んだ、その年の栽培は無し。

次の年は他の園へお泊り保育に行った。いろいろな園の先生や遠方からもたくさんの方の支援をしてもらった。もちろん自分の園の子どもがかわいい。しかし、こうして支援をしてもらう中で、外にも目を向けるきっかけになった。いろいろな人を慈しむ心が育まれた。

津波の被害を受けた子どもがくさいカニを拾ってきた。これを見て「海に行けていますね」と先生たちも喜んだ。海岸への出入りが解禁され、幼稚園でも子どもたちと出かけた。今までは全く震災や津波のことをはなさなかった子どもが、そこから、「流された家に行ってきたよ」など話をするようになった。積極的に働きかけるところと、見守るところのバランスが大切であると感じた。子ども同士でも話をする姿も見られる。子どもたちは障害や問題を乗り越えていく力があることを改めて感じた。

近所の公園では最近やっと小学生が見られるようになってきたが、まだ草だらけ。

行政が作る室内遊び場は増えてきたが、全て時間で入れ替え。ボール、滑り台はあるがどこかあそばされているような感覚が拭えない。園の子どもも連れて行ったが、「またきたい?」と聞くと「もういいよ」と答える。でも、室内遊び場を作るということは、外は安全ではないと言っているようなもの。だったら予算を作って自然体験ができる場所を作って欲しい。

自由に外に出られるようになったのは2014年、今年の4月から。今までは3人いれば山へ行ってもよかった。しかし、山での過ごし方や約束などが伝承できなくなってしまったので、また0から伝えていく。

自然災害は避けようがない。放射能があっても災害があったらとにかく逃げなくてはいけない。しかし普段から、閉じ込めてしまっていたら非常時に枝も見たことが、泥を歩いたこともない、山も歩いたこともないでは非難するときにもっと怖い思いをするかもしれない。なにもできない子にならないように、日頃からの経験も大切だ。放射能のせいで「本当はこうしたいけど…」でもできないのでやり方を変えることは多い。震災後は放射能があることが前提の生活となった。子どもからも「これ放射能あるからダメ?」と聞かれることも。

自然や外遊びの重要性を感じたのと同時に、室内遊びの可能性に気付き、環境の見直しを行う事ができた。

### 震災後の避難訓練

避難訓練は年少も4月の一週目で靴をはく、キャップをかぶるを徹底をした。先生の声聞く、ダンゴムシになる、も習慣として身につくようにした。

4月以降は職員にもしらせず、抜き打ちで訓練を行った。訓練で、駐車場に避難する際、車が通ったので子どもをとめて車を通した。しかし「まず子どもを渡して!」という副園長の声。そこで先生たちも気付き、それ以降は自分たちで考えて行動するようになった。

幼稚園は訓練をそこまでやるように指導されていないが、月1回は必ず行い、プール、引き渡し等いろいろな訓練をしている。

### 震災への備え

お母さん達のアイデアで名刺大の緊急時の対応を書いたカードを作った。

「早くこななくてもいい、生きて迎えにきてください」、と話をした。親との約束や意識を共有できていることを実感する。総会でも話し合っていて決めている。

備蓄品はホッカイロ、生理用品、オムツ、布、カンパン、チョコ、水、米、炭があるとよい。

家や車の中にも、水、チョコ、毛布、カンパンぐらいいは入れておくよう呼びかけている。

また水は期限が切れてもすぐには捨てずに、手洗い用などで使うのでしばらくは保管する。

一年間部屋で過ごして保育室、保育内容の見直しができた。

### 保護者の話

・震災後、津波に注意の放送があった。海からは少し離れているし、大丈夫だろうと思ったが、祖母が「いちよう行こう」と言うので高台に避難した。高台についた頃には、服を着ていない人や、全身が濡れている人、中には遺体もあった。その後自宅へ一度戻ったが、壁が壊れ、がれきだらけだった。家の中には消防の人なのか泥の足跡も残っていた。財布だけを持ち自宅をあとにした。その後埼玉スーパーアリーナに避難。避難所というと、体育館など狭く暗い感じをイメージしたが、至れり尽せりの対応だった。またしばらくして、自宅の地域への立ち入りが許可されたので戻ると、野次馬がすごく、自宅に着くまでに何時間もかかった。

- ・震災の事は大丈夫。しかし放射能が怖い。
- ・子どもは震災のことは何も覚えていない。
- ・地震ごっこ、津波ごっこをする子どもたちの姿がある。しかし最後には「助けにきたぜー！」と助けるような存在が。
- ・放射能と共存していこう、怖くないんだよ。隠さずやっ払いこうとする園の姿勢をみて、ここにしようと思った。
- ・震災後、家族で集まる場所は決めた。放射能に関しては特に言っていないかも。
- ・「なにもないと思うな、生き残ったのには役割があるから」と話をしている。
- ・毎日出かけるときは、声をかけるようにしている。また出掛け先も書き出していくようにしている。
- ・震災のことについてはあまり話さないようにしている。でも食べ物、口に入るものだけは気にして、よく洗うように言っている。また水道水は飲まないように言っているが、学校の部活などでは飲んでいるんだろうな…。

#### まとめ

危機管理能力がある子は助けてもらえる。助けてもらえる子どもに育てたい。自分の命を大切にできる子どもにしていきたい。その子たちは大人になったとき助けてあげられる人になる。

「よく考え、のびのびと行動できる子」「心情豊かに、誰にでも優しくできる子」から「よく考え、のびのびと行動できる大人」「心情豊かに、誰にでも優しくできる大人」へ。

“子”がそのまま“大人”に成長したらとても立派な人。そうなって欲しい。命の大切さ、暖かい心を育てていきたい。

### 7 津波被災沿岸部視察 (8/28)

当初の予定にはなかったが、津波被害などのお話をお聞きし、津波被害にあったいわき市の沿岸部へと立ち寄ることになる。沿岸部についた頃にはすでに夕暮れ時となり、十分な視察ができたとは言えない。

すでに瓦礫は撤去されているが、家屋の基礎の跡や、津波が到達したが、流されなかった建物が痛々しく残されていた。

#### 報告会後の受講者の感想・意見

##### 1 園長 45年 とてもよかった

子どもに対しての姿勢は震災があってもなくても、変わらないはずですが、改めて、もしもの時の覚悟は、更に具体的に確認して置かなくてはと思いました。

ほうとく幼稚園の報告の最後に、自分の命も他人の命も大切にできる人間に育てて欲しいという理念に大変共感します。それぞれの園が(園長が)子どもの豊かな育ちのために何ができるか、するのかを強い信念で関わるのがいかに大切だと感じます。

##### 2 園長 20年 とてもよかった

放射能汚染については、まだまだという思いはあったが、現地の人は、より感じているということ強く思った。それと同時に悪いのは汚染なのに対立しなくてはいけない、心のやり場のない気持ちがつらい。いつまで続くのか？政府としてはどれだけ動いてくれているのでしょうか。

幼稚園の先生たちの強さ、子どもに立地する真剣さ、保護者の協力、全てが大切であると感じた。経験しないとわからないことがたくさんあると思った。自然の大切さ、それによる言葉掛けの大切さを改めて感じた。

##### 3 教頭 よかった

新聞報道等ではわからない、生の様子が伝わってきた。

現状はまだまだ厳しいなと思った

##### 4 教諭 9年 とてもよかった

想像はしていたけれど…震災後の生の姿、福島の方たちの感じたもの、頑張り、不安、いろいろな物が目の前にあるように近くに感じる事ができてよかった。きっと、様々な理想と現実の間でみなさん日々葛藤しながら今日までやってこられたんだと思います。その重さをとても感じました。

私の幼稚園は自然たっぶりの中で、のんびりのんびり遊ぶ園です。その恵まれた環境の中で多くのことを感じて成長していつてもらいたいと願っています。震災から3年、子どもたちの体と心の成長に大きく関わらさう自然との触れ合える時間が少ないということは、最大の心配です。

東海地方も大きな震災がいつ起こるかかわからないです。でも今、私たちで、かんがえられること、やってみることは大切だと月1回の訓練や引き渡し訓練で、できる限り実践してみたいです。小さな心がけが安心に繋がれば良いと思います。

5 教諭 8年 5歳児 とてもよかった

TV、ニュース、雑誌などでの情報しかないため、ここ最近、災害の話が風化されはじめ、(あまり情報がでなくなったため)自分としても忘れがちである。

今回の体験をストレートに聴いた今、3年経とうが、5年経とうが、この仕事をしている以上、忘れてはいけないことだと思う。

園の保護者でも、福島含め北の産地のものは×という人が結構いる。良いも悪いも、もっと向き合わないといけないと感じた。

とても為になる良い研修をありがとうございました。

6 園長 20年 とてもよかった

貴重な報告、レポート、ありがとうございました。

一番大切な備蓄は、信頼関係という言葉がズドンときました。

毛布も全く準備していないので、まずはできることをします。そう感じる事ができた研修でした。

ちがう角度から保育という仕事を立ち止まって考えることができる唯一の研修のように思います。

1400kmの旅、本当にごくろうさまでした。

7 園長 20年 とてもよかった

実際に目で見たことを、リアルタイムで記していただけたことは胸に迫る思いです。

特に福島での風評被害はとても大きく、ささいなことですが物品等の購入で、微力ですが援助していきたいと思っています。

8 未記入 未記入 未記入 良かった

客観性を重視するのは大変だと思いますが、ただそのままを伝えるのではなく、ポイントを絞って話してもらえらるともう少し聞きやすくなったと思います。

TVや報道等では知り得ない葛藤や苦しみは伝わってきました。

9 園長 35年 とても良かった

客観的今の事実、実情でしたが、たいへんびっくりしています。予想はしていましたが、ここまで生活や心が壊されていく現実に自然災害だけでなく、人が人を壊していくことがとても悲しいです。

組織として子どもの命を守る活動は声を大にして、連携して訴えていくべきだと思います。

10 教諭 10年 5歳児 とても良かった

情報として知っていても、実際の現場に立ってみて心を動かされ、実感できることが本当にたくさんあるのだということ!!

そして、その方々のお話を聞くことができてとても良かったです。

自分だったらどうするのかな...と考えながら聞きました。

子どもたちを守るための熱意と行動力のある保育士でありたいと思います。園の方で、内容を報告し、より理解を深め合いたいです。また家庭でも今日の話をして考える機会を作ろうと思っています。

ありがとうございました。

11 理事長 43年 良かった

自然が汚染されたという事実から我々は何を今後やっていくべきだろうかと考えさせられた。

子どもにとって自然が大切だと強く認識させられたのも事実だが、無残に破壊されたことも事実で、これから学んで、対応していかなければと思った。一国だけの力では対応できない、束ねた力の必要性を感じた。

12 20年 5歳児担任 とても良かった

無記入

13 園長 40年 良かった

無記入

14 園長 30年目 とてもよかった

被災地への取材、お疲れさまでした。「何よりも現地」放射能の実態がよくわかりました。

改めて何の問題なく自然、屋外で遊べる愛知県。豊かな環境に感謝します。引き続き放射能のチェック機能として保護者の立場、子供の立場としてご支援ください。

主任 8年 3歳児

15 報道で知る福島とは違う今の現状を知った。震災から3年経って進んでいると思っていたが、新たな問題も出てきて何も変わっていないんだと感じた。怖いと思った。自分が忘れないよう、知ることが大切だと思う。見えない、知らない怖さ。放射性廃棄物が仮置き場としてあちこちにあるというのも驚いた。それをどこに処分するのか？そのままになってしまうのではないかと不安を感じる。

16 園長 未記入 とてもよかった

ご苦労様でした。特に若い保育者の皆さんが3ヶ園を訪問され、人の脆さと強さ、そして安心感というものが何によって保障されていくのかを深く気づかれたことは素晴らしいことです。今の政治の流れの中で、どうしても幼稚園運営は良心に左右されると思います。子どもたちのために謝らないといけないような判断はしたくないですね。この福島の状態を知ってしまった以上知らんぷりはできませんね。これからどのように関わって行かれるか期待しています。何事も最終的には個々の人々の努力に委ねられていくこと、そのものに疑問を持ちます。

17 教諭 5年 とてもよかった

震災後被災地へ行って現状を知ったり見て感じたりしたいと思っていたが、自分の行動力もなく、そういう機会を作ることができなかったが、今日の報告を聞いて園の様子を時系列に並べてどんな状況だったかということと、どんな思いで行動していたかということを知れ、自分がもし被災者になった時どんな行動をとるべきだか、子供たちに伝えるべきか考えるきっかけになった。又、園と家庭間との信頼関係が一番大切という言葉がとても印象的だったので、地震などの備えと共に信頼関係を強く築いて行けるようにしたい。